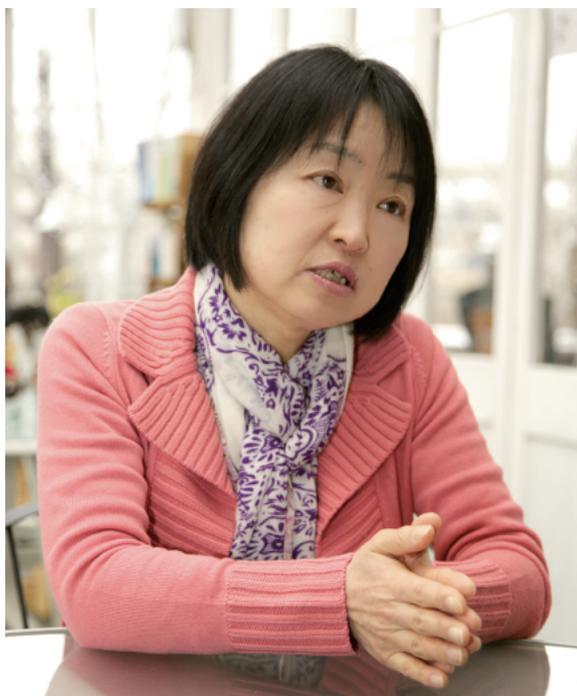


# 島田恵さんインタビュー

## 「原発の問題を、どうしたら地元以外の人たちにも『他人事』ではなく『自分事』として捉えてもらえるのか、そのことをずっと考えてきました」

「あなたはいのちのバトンをわたしますか／それとも放射能という「負の遺産」をわたしますか」——「原発」に翻弄される人たちの姿を通じて、観客にそう問いかける映画『福島 六ヶ所 未来への伝言』。これが初の監督映画作品となる島田恵さんに、写真家として追いつけてきた青森県六ヶ所村への思い、そして映画に込めた思いをうかがいました。

●聞き手・構成／仲藤里美(ライター) 撮影／吉崎貴幸



### 「生活者」の視点から六ヶ所村を見つめたかった。

——島田さんの初監督映画作品「福島 六ヶ所 未来への伝言」では、原発事故が起こった福島とともに、再処理工場など核燃料サイクル施設を抱える青森県下北半島の六ヶ所村がテーマとなっています。島田さんは写真家として、この核燃料サイクル施設の立地が進展していく1980年代後半から六ヶ所村の取材を続けられてきたとうかがいました。そのきっかけは何だったのでしょうか。

島田 初めて六ヶ所村へ行ったのは1986年の夏、市民団体の主宰するスタディツアーです。青森県と六ヶ所村は、その前年に核燃料サイクル施設立地受け入れを正式決定していたのですが、86年の4月にチェルノブイリの原発事故が起こったことで、六ヶ所村での反対運動が大きな盛り上がりを見せていた時期でした。

ただ、このときは原発や核燃料サイクルに関する知識もなく、地元の人たちの話に驚くばかりでした。本格的に取材を始めたのはその年の秋、二度目に六ヶ所を訪れてからです。施設建設のための海域調査を阻止しようとする行動を目の前で見て、すごい衝撃を受けたんですね。それまでは、原発は危険だからという意識はあっても、六ヶ所村につくられようとしている施設がどんなものか、きちんとはわかっていなかった。地元の漁師さんやお母さんたちが機動隊と睨み合い、まさに身体を張って抵抗しているのを見たときに、「これは本当に大変なことなのかもしれない」と初めて気づいたんです。

個人的に、写真家として何か自分のテーマを持ちたいと考えていた時期でもあったので、ここにかかわっていろいろ決めました。それで、東京と青森を行ったり来たりしながら現地の人々の話を聞き、反対運動の様子を撮影するようになったのです。

——そして1990年には、六ヶ所村へと移住されます。

島田 最初は「移住」という意識は全くなかったんです。その翌年、91年の2月に青森県知事選挙が予定されていて、チェルノブイリ以降反対運動が政治的にも一大勢力となる中、核燃の是非を真っ向から争う選挙になろうとしていました。その現場に絶対立ち会っていたかったため、半年か1年くらい現地に滞在して取材しようと思ったんです。結果的にはそのまま、12年も暮すことになるのですが(笑)。

——しかし、その県知事選挙では核燃立地推進を掲げる現職知事が当選。県内の反対運動は急速に力を失っていきます。

島田 あれだけ全県的な反対運動が盛り上がりつつあったにもかかわらず、選挙では負けて、施設の建設がほとんど進められていくことになった。翌92年にはウラン濃縮工場が操業開始し、93年には再処理工場の建設工事も始まりました。その中で、「何をやっても無駄なのか」という無力感が蔓延していましたね。私自身も撮るべき被写体を見失ったというか、何を撮ったらいいんだらうという迷いの中で、ひどく落ち込みました。何度も「東京に帰ろう」と思いました。

——それでも結局はとどまられたのはなぜでしょうか。  
島田 もちろん、生活する中で地

元の人たちとのつながりが濃くなっていったことは大きかったですね。それから、この先青森や六ヶ所がどうなっていくのかを生活者としてもう少し見届けたいと思っただけです。「よそ者」という立場は変えられないけど、そこに「暮す」ことで、もつと生活者目線で物事がとらえられるかもしれない、と思いました。

また、今の日本社会に共通する構造が次第に見えてきたということもあります。六ヶ所村にはかつて「むつ小川原発」計画があり、人々はバラ色の夢を見させられました。それが頓挫したら今度は核燃料サイクル基地がやってきて……と、国のエネルギー政策に翻弄されてきたのです。原発だけではなく沖繩の基地問題などもそうですが、この国のありようは、社会的に弱い立場に置かれた人たちの犠牲の上に成り立っているということ、六ヶ所村で暮すことで実感しました。東京から通うだけだったら、自分が「他人の足を踏んでいること」を意識できなかったと思います。

### 原発がある社会の、「入り口」と「出口」を描く。

——今回の映画は、東日本大震災よりも前に企画されたもので、当初は六ヶ所村を中心とする青森県だけを扱う予定だったそうですね。

島田 はい。「一区切りつけよう」と思って2002年に東京に戻った後は、家庭の事情などもあって六ヶ所のことからはしばらく遠ざかっていたのですが、「何かしたい」という思いはずっとありました。それで、改めて六ヶ所について自分が伝えたいことは何だろうと考えたときに、それは青森の人たちの「抵抗

の記録」だと思ったんです。

——抵抗の記録ですか？

島田 というのは、「STOP ROKKASHO」プロジェクトなどによって核燃問題が少しは知られるようになってきてはいますが、一方で「六ヶ所の人たちは交付金ほしさに、こんな危険な核施設を受け入れた」という見方があるのがとても残念だったんですね。たしかにお金は最大の誘因ではあるけれど、だからといって人々は何も考えずに計画を受け入れたわけじゃない。賛成・反対をめぐって親兄弟や親戚が互いに対立するような壮絶な状況を生み、その中で必死に続けてきた反対運動も潰された。核燃



島田恵(しまだ・けい) 写真家、映画監督。1959年、東京都生まれ。写真雑誌社、撮影スタジオなどの仕事を経てフリーランスの写真家に。1986年のチェルノブイリ原発事故後、核燃料サイクル施設の建設問題で揺れる青森県六ヶ所村を訪問。以後、東京と青森を行き来しながら、施設の建設強行とそれに抵抗する人たちの取材を続ける。1990年から2002年まで六ヶ所村に在住。2011年、新たに映像分野で核燃問題を伝えようとする映画制作を開始し、初の監督作品『福島 六ヶ所 未来への伝言』を完成させた。2001年に写真集『六ヶ所村 核燃基地のある村と人々』(高文研)で第7回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞。著書に『いのちと核燃と六ヶ所村』(八月書館)がある。